



TITLE:

# 新しい教育関係ユニット:新しい教育空間に関する取り組み 2009年度

AUTHOR(S):

桑原, 知子

---

CITATION:

桑原, 知子. 新しい教育関係ユニット:新しい教育空間に関する取り組み 2009年度. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書(2007-2011年度): 58-59

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179732>

RIGHT:

## 新しい教育空間に関する取り組み 2009年度

### 1. はじめに

コラボレーション・センターの「新しい教育関係ユニット」では、これまでの教育システムとは異なる、新しい教育空間に対する関わりを進めてきた。なかでも、不登校生徒のための学校として新しい学校形態をもつ「洛風中学校」への関わりを中心に、既存の学校システムとは異なる「学校」への取り組みを行ってきた。2009年度の活動報告にあたっては、これまでの取り組みを紹介するとともに、こうした「新しい教育空間」を、教育システム全体のなかでどのように考えればよいのかということについて検討してみたい。

### 2. 洛風中学校

洛風中学校は、平成14年に始まった構造改革特別区域法に基づき、京都市が国から認定を受けた「京都市不登校生徒学習支援特区」事業として、平成16年10月に開設された、不登校生徒のための自立と学習支援を目的とした公立の中学校である。この「洛風」という名前は、これまでになかった形の中学校として京都に新しい風を起こしてほしいという願いが込められているという。

この学校は、単に、不登校生徒を学校に来させるという目的のために設置されているものではない。子どもが生き生きと登校できるような学校とはどんな学校なのか、それを模索している学校なのであり、教育の未来へのヒントをさがしている学校とも言える。建物は鉄筋であるが、教室はふんだんに木が使われており、少人数で授業が行え、また、子どもたちが自在にリラックスできるようなきめ細かい配慮が随所にみられる。カリキュラムにも工夫がなされ、「創造工房」や「ヒューマン・タイム」など、ユニークで実質的な体験を生かすような時間をもっている。



▶洛風中学校

### 3. コラボレーション・センターとの関わり

京都大学大学院教育学研究科は、心理臨床学関連領域の講座を中心として、この洛風中学校に開設当初から関わってきた（洛風プロジェクト）。その際、我々がどのように関わっていけばいいのか、洛風中学校にとって「役に立つ」関わりとはなにかということを模索しながら、ゆっくりとしたアプローチをとるよう、心がけてきた。こうした関わりを続けるなかで、不登校「問題」に目を向けるだけではなく、「学力をどう確保していけばいいのか」、「そもそも自分たちがおこなっている教育実践がこれでよいのか」、「その意味はどのようなものなのか」、「外部からの視点で、私たちの教育実践をとらえなおしてほしい」といった声が、教師の側から聞かれるようになった。

そこで、コラボレーション・センターが発足してからは、こうした教師の声にこたえるべく、新たな関わりを開始することとなった。

まず、教員、大学院生が洛風中学校を訪れるなかで、これまで学校運営に努力されてこられた先生方の「生の」声を聞いた。新しい実践は、必ずしも平坦な道ではなく、試行錯誤の繰り返しでは、傷も負う。2008年度は校長先生や教員の異動があり、これまで継続して行われてきた実践が継承されるとともに、新しい目での取り組みが行われる年ともなった。いわば、できあがりつつある体制に振動が与えられ、より強固で柔軟性を備えたものへと変革する年であったといえよう。2009年度は、こうした流れを経て、洛風中学校が、いわば「子ども」から「大人」へと成長するかのごとく、学校としての成長が見られた年のように思われる。これまで築きあげられてきたシステムや取り組みがある程度定着し、その分、既存の学校と同様の悩みも生じてきたのである。

コラボレーション・センターからは、2007年度に引き続いて、2008年度も、「心理臨床領域」の教員だけではなく、「臨床教育学」講座の教員も参加することにより、さらに広い、「教育」という視点から教育実践を見守ることとなった。こうした「外」からの「目」によって、普段、無我夢中で取り組んでおられる学校運営に対して、客観的な視点を提供したり、そうした取り組みのもつ「意味」を明らかにすることをめざしてきたのである。

そして、2009年度には、学校側からの要望に応じて、さらに関わりの幅をひろげ、教育科学専攻の教員とともに学校を訪ねた。そして、これまでの心理臨床的関わりの他に、「学力」の問題についても、研修会と相談の場を設けた。欠席や遅刻ということが避けられない洛風中学校の授業状況のなかで、どのように学習を進めていけるかという困難な問題について、ともに考える時間をもった。

こうした、「横の拡がり」だけでなく、2007年度か

ら続けてきた「事例検討会」では、さらに事例への理解を深め、最近話題となることの多い「発達障害」の事例を取り上げて検討した。

#### 4. 新しい教育関係実践の「交流」をめざして

「特区」を利用した、新たな学校運営をするという試みは、洛風が最初ではない。すでに、八王子市では、全国に先駆けて、不登校児童・生徒を対象とする「高尾山学園」が設立されていた。しかし、こうした取り組みは、それぞれが別個に実施されており、相互の関わりはなかった。そこで、2006年2月19日に、全国のエデュケーション分野における「特区」制度を利用した取り組みが集まって、「特区サミット」が京都で開催されることとなった。この「交流」の意味は大きいと思う。新たな試みを手探りで進める人たちが集まって、その実践を確かめ合い、また「苦労話」を共有することで、その取り組みを相対化していくことが可能となり、また、連携への可能性につながったといえるだろう。

ただ、このサミットは、意義深い試みだったとはいえ、時間も短く、「顔合わせ」の域を越えることができなかった。そこで、こうした「つながり」を今後も保ち続けるべく、こうした新しい教育関係を実践する教育現場を我々が訪問することで、今後の連携への礎を築く試みを続けてきた。

2007年度は、八王子市高尾山学園、愛知県黄楊野高校、和歌山県きのくに子どもの村学園を訪問した。また、2008年度は、新たに北海道の北星学園余市高等学校への訪問がかなった。さらに、2009年度は、「特色ある取り組みを行っている学校現場」への訪問として、大津島小・中学校と生野学園高等学校・中学校への訪問が実施された（詳しくは、「学校現場における心理臨床的関わりについての実践的研究」p. 67参照）。

これらの学校は、それぞれに個性的であり、新しい教育関係というものが、画一的ではなく、ユニークな独自性をもっていることが明らかになった。

#### 5. 新しい教育空間 ～学校を問い直す～

2009年度には、こうした新たな取り組みをしている学校や個人を中心として、学校とはどのようなものか、それを問い直すという試みをおこなった。

シンポジウム形式でおこなわれた会では、(1)京都市立醍醐西小学校から、(2)洛風中学校から、(3)童仙房のホームスクーリングの実践からそれぞれ取り組みが紹介され、議論した。（詳しくは、「公開シンポジウム『学校を問い直す』」pp. 18～19参照）。

ここでは、洛風中学校の須崎教頭先生の報告からいくつか取り上げて紹介してみたい。

・洛風中学校は、これまでの学校がすべてではないというところから出発している。まさに学校を問い直す学校。既にあるものを受け入れるところから始まるのではなく、既にあるものに疑問を投げかけ、一から形づくるところから始めた学校であるところに意義がある。

- ・子どもの自主性を尊重する学校である。  
自主的に「学校をよりよくする会」を結成。そこから生徒自身が校則を作り出す。生徒も教師も、生徒を守るためには枠となる決まりが必要だと実感。
- ・生徒自身が生きっていると実感できる体験を大切にしている。内的な体験の重視。

洛風中学校は、子どもが自分の意志で登校できる学校である。休みたいときには休める。しかし、学校というもののすべてを否定しているわけではない。たとえば、既存の学校には行けないものの、集団には所属したいという生徒が洛風に来る。また、全くの自由を求めているわけではなく、「枠」を必要としている。不登校という現象は学校というもののすべてを否定しているのではなく、学校において重要なものでありながら今の学校において得られがたいものを浮き彫りにしているのではないだろうか。それは、学校のなかで役割を与えられ、自らの居場所を見つけること、そして、生きているという実感のある、凝縮された「時間」を過ごすことかもしれない。

学校は、「自明」ではない。絶えず新たな目で学校を見直すことによって、「新しい」教育空間が再生されるのではないだろうか。コラボレーション・センターでは、今後もこの活動を続けることによって、よりよい教育のあり方を模索していきたい。



▶2009年11月7日に開かれたシンポジウムにて

(文責：桑原 知子)